

# 表面技術

Journal of The Surface Finishing Society of Japan

No.  
**10**  
2015 Vol.66

HYGIEX 66(10)437-494(2015)

小特集

無電解めっきの動向(I)



一般社団法人 表面技術協会

<http://www.sfj.or.jp/>

## 巻 頭 言

### 表協とIMFのこと

兼 松 秀 行\*



今回巻頭言を書くように仰せつかりました。ふさわしい話題かどうかはわかりませんが、今年招待を受けて講演したイギリスのある学会のことを書くことをお許しいただきたいと存じます。私は2001年から英国の材料表面処理学会(Institute of Materials Finishing, IMF)の正会員となっています。きっかけはNASFが開催した米国シカゴでのSur/Fin 2000における私の講演でした。英国から参加している一団がいました。大先生風の方が前列に陣取って、私の講演に盛んに質問をされました。当時の私はまだ40歳を過ぎたばかりの、まだまだ血気盛んで不遜な研究者でありました。そんな私は、いつものように大先生らしき方のご質問に“しめしめ”と思ったのですが、その後、立ち話をする機会があり、その方が英国ラフバラ大学のDavid Gabe先生であることを知りました。その時先生から“IMFに入らないか”とお誘いをいただいたのでした。帰国後、私の恩師の沖先生にご相談したのですが、“外国の学会を中心に活動する研究者として生き残っていくのも一つの生き方だよ”とご意見をいただきまして、腹が決まりました。その後Gabe先生ご自身と沖先生のご推薦をいただいて正会員MIMFとなりました(通常の会員はAffiliateで、MIMFは一定の経験と実績が必要で会議で認められます)。その後すぐに彼らの編集委員会に誘われて、この仕事は現在もなお続いています。Gabe先生からは、“IMFと日本の表協の架け橋にぜひなってください。きっとあなたにはそれができるのではないか”との期待をお寄せいただきました。残念ながら、Gabe先生のメガネ違いであったようで、その件では私は全くお役に立てず、いたずらに年月を経てきたように思います。一昨年沖先生が旅立たれて、名古屋で中部支部追悼の講演会が開催されました。当時の支部長の久米先生が“イギリスから誰か呼んでくれないか”と私にお命じになったので、私はIMFの編集委員会委員長をなさっているラフバラ大学のGeoffrey Wilcox先生に頼んだのですが、編集長のClive Larson博士から連絡があり、前会長のPaul Lansdell博士が手を上げてくれていて、来日されるということでした。2014年の夏のことでした。Paulとは初対面でしたが、すぐに意気投合して、今年私は念願だったIMFのIMFair2015で講演をすることになりました。尊敬していたBirmingham大学元教授のPeter Farr先生にお目にかかることができ、とても嬉しく思いました。先生はもう83歳ですから、今後度々お目にかかることは難しいだろうと思います。

IMFとは本当にご縁があったと思います。私は現在バイオフィルムの研究をしていますが、これはGeoffの前の編集委員長だったPortsmouth大学の今は亡きSheelagh Campbell博士の勧めでした。私が鈴鹿高専で教授にいただいたときに、どこからともなく聞きつけて、私にFellowの称号を送ってくれたのもIMFでした。このFIMF (a fellow of IMF)の肩書きを、私はとても嬉しく誇りに思っています。2012年に米国のNASFからScientific Achievement Awardを頂戴したときもIMFのジャーナルに大きく取り上げてくれました。今年のIMFairでも幹部のみなさん本当に親切にしてくださって、仲間に入れてもらっていると実感でき、とても感謝しています。



さて、IMFが私にしてくれたことはとてもありがたいのですが、そもそも私はGabe先生との約束をどこまで果たしたのでしょうか？ Sheelaghから聞いた、あったこともなかったFarr先生の私への長年の高い評価に答えたのだろうか？ お商売の関係もありますし、学会の性格と特徴の違い、国民性の違いなどから、こうした学会間の交流は思ったほどに簡単なことではないだろうと思います。しかしこんなことを繰り返している会員が一人、少なくともここにいる、ということをご承知いただき、お役に立てることがあるならば、遠慮なくお声がけ頂ければと思います。喜んで皆様のお役に立ちたいと思っています。

\*鈴鹿工業高等専門学校 本会 理事